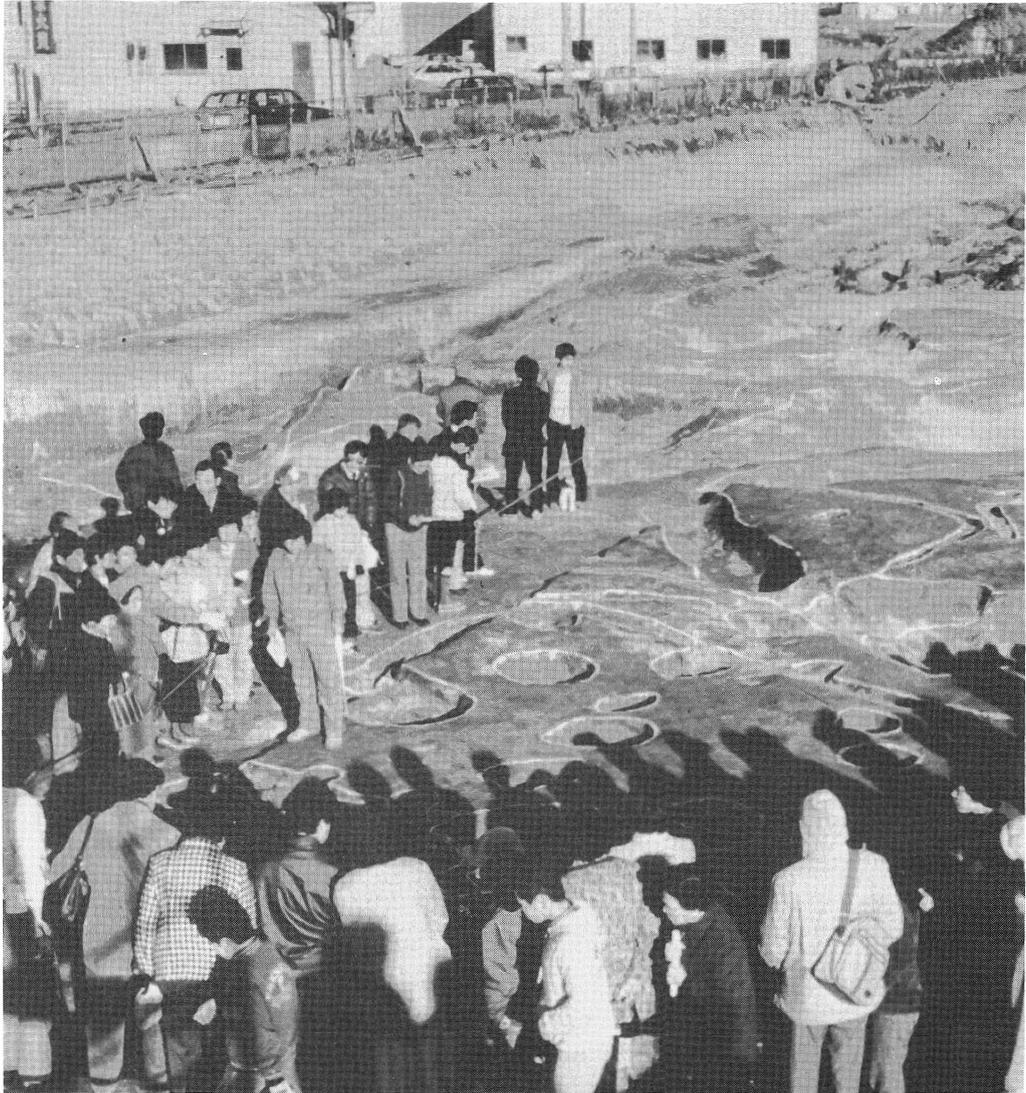


埋蔵文化財 愛知

No.4



現地説明会

本紙3号で取り上げた朝日遺跡『玉作遺構』^{たまつくり}を中心とした現地説明会が、昨年12月21日行われた。参加者は約200人であった。小学生からお年寄まで幅広い年齢層の方々が集まり、熱心に説明に聞き入るとともに、しばしの間およそ二千年前の昔に思いを馳せた。

(7ページに関連記事記載)

城下町調査の成果と課題

城館跡をめぐる最近の動向

様々な性格を異にする遺跡のなかで、城館跡といわれるものは、全国で約1万8千箇所（昭和55年現在、消滅したものは除く。）にのぼり、その大半は、中・近世の、わけても戦国時代に属するもので占められている。愛知県下においては約830箇所（昭和54年現在）の城館跡の所在が確認されているが、約半数はその実態が判然とせず、既に消滅しているものも多い。

これらの城館跡は、従来、城郭史研究者らによる測量（縄張）調査等の対象とはなっても、考古学上の研究対象とはなりえてこなかった。が、近年では発掘調査が活発に実施されるようになり、県下の事例を見ても、下津城跡（稲沢市）、沓掛城跡（豊明市）、岩崎城跡（日進町）など、20箇所以上を数えることができる。しかし、それらのほとんどは、城館そのものに発掘調査の範囲が限定され、城館を城館として成り立たせる他の諸要素 — 城下の居館群、市町、集落等々 — にかかわる空間へと、それが広がることがない。城下町の遺構をも調査しているのは、わずかに名古屋と清洲の2箇所程度である。

清洲城とは

清洲城は15世紀ごろの築城とされ、当時尾張国守護所の置かれていた下津城が文明8年（1476）に焼亡してまもなく、ここに守護所が移され、以後、守護斯波氏、守護代織田氏が居城していたとされている。その後、弘治元年（1555）には織田信長が守護代織田信友を討ってここに進出し、歴史の表舞台に登場することとなった。信長没後も、織田信雄（1582～90） — 豊臣秀次（1590～95） — 福島正則（1595～1600） — 松平忠吉（1600～07） — 徳川義直（1607～10）と尾張国の領主権を継承した人々が居城し、逐次発展していったのである。しかし、徳川家康の命のもと慶長15年（1610）から足かけ4年の歳月を費やして実施された名古屋

屋への「清洲越し」によって、この城と町はことごとく解体しつくされ、その雄姿も記憶の彼方にかき消されてしまったのである。

信長期の清洲城下町

こうした経緯を有する清洲城下町の発掘調査は、名古屋環状2号線建設に伴う緊急調査の一つとして、昭和57年度から開始され、五条川を挟んで朝日西遺跡と城下町遺跡との東西2地点で実施されている。検出された遺構群は大きく2時期に分つことができ、それぞれ特徴あるあり方を示している。

第1期の遺構群は、第2期の城下町の成立によって廃絶されていて、その出土遺物は16世紀の前半を中心とした時期に属するものが主体をなしている。こうした遺構群は城下町遺跡においてのみ検出され、朝日西遺跡には検出されず好対象をみせている。遺構配置をみると、四至を溝で囲んだ屋敷地は企画性に乏しく、また方格地割を想定させるような、縦横に直交して走る溝が検出されるなど、総じて中世的な傾向が強いものとなっている。これらの遺構群の性格については、今後の研究をまたなければならぬが、城下町遺跡に北接して御園神社が位置していることは、歴史学で問題となっている「みその市」の存在と相まって注目されるであろう。「みその市」は御園神社を舞台に成立した市場で、16世紀には三斎市として展開し、山王社の「中市場」とともに、信長の清洲経営において重要な役割を担わされていたとされているからである。遺構群をただちにこの「みその市」に結びつけることはできないが、少なくとも「市」をめぐる状況の一端は語ることができるであろうし、信長の城下町経営の歴史的性格を検討する上でも意義ある一資料を提供することができるであろう。信長段階の総堀の遺構と考えられていた中堀も、より新しい時期に開削されたものであることが判明し、この期の清洲のありようについては、有力領主たちの居館

の集積とそれに付随する市町とが結合した存在形態として再検討がせまられているのである。

信雄以降の清洲城下町

第2期の遺構群は、都市（近世城下町）プランニングの根幹たる堀割と町割を垣間見せている。城下町を巡る三重の堀のうち中堀・外堀が調査区内で検出されたが、いずれも素掘りであり、石垣等の施設を持たないこと、自然堤防等のわずかな地形の起伏を巧みに利用して防禦等の効果を高める構造となっていること、更に町は外堀内に留まって外へと広がらないこと、等が明らかとなってきた。堀割については、既に『清洲村古城図』等の絵図をもとに、地籍図の検討やボーリング調査等もふまえて推定復原が試みられているが、発掘調査の結果はそれらがおおよそ妥当であったことを証明することとなったのである。一方町割について見てみると、第一に、武家地、町人地、寺社地の区分が截然となされていること、第二に町筋は南北方向に走って城の大手口への通りに併行していること、第三には町家は背割線が直線的に通った両側町を形成していて、個々の屋敷地は東西方向に細長い短冊型となっていること、などが知られる。特にこうした町割が朝日西遺跡において顕著に認められることは、注目する必要があるであろう。なぜならば、当遺跡ではそれらの遺構群に直接に先立つものは存在せず、従ってその町並はまさに都市計画に基づいて新たに創出されたものに他ならず、城下町のプランニングをもっとも端的に表現していると思われるからである。そしてそのプランニングが近世城下町の初期形態である総構型城下町の一典型を示していることには相違ないであろう。

近世城下町の成立

第2期の遺構群は、いったいつ頃のものなのであろうか。廃絶の時期は「清洲越し」が実施された慶長15年ごろということになるが、成立時期については、なお不明なところがある。伴出遺物の編年観によれば、16世紀の後半、概ね第4四半紀以降に属するものが大半を占めている。この年代観は、出土遺物の中に含まれていたいくつかの紀年銘資料の示す年代とも、齟

齟をきたすことはない。ことに「天正14」年

(1586)の紀年銘のある玉縁丸瓦片は、第2期の遺構群の成立時期を考える上で示唆するところが多い。従来からこの年については、信雄（信長の次男）の清洲入城と城の修理、拡張の年として注目されていたところである。しかし翻ってみれば、天正期は日本城郭史にとっても一大画期をなす時期であった。天正4年(1576)に始まる信長による安土城の建設は近世城下町の嚆矢として著名であるが、天正10年代にはいると、豊臣秀吉らによってその方向性は一層拍車がかげられることとなる。大阪・京都を始めとしてこの時期に着手された城下町建設には目を見張るものがある。信雄の清洲城の修理・拡張が、言葉どおりの意味での修理・拡張にとどまるものであったか否かは、なお慎重な吟味を要するであろうが、少なくとも発掘調査の結果にもとづけば、この天正14年に近世的な清洲城下町の成立の画期を求め得ると思われるのである。

今後の課題

16世紀から17世紀の初頭にかけての時期は言うまでもなく、幕藩体制の確立に取れんしていく戦国の動乱期であり、権力編成原理が大きく転換していく時であった。一地方都市とはいえ清洲も例外たりえず、尾張支配の拠点としてもその姿を変えていったようである。それは、先に述べてきたように、発掘調査の結果に如実に現われていると言えよう。しかもそれは、良好な同時代史料に乏しい当該期の清洲について、断片的な記述からの復原が往々にして重大な誤差を含んでいたことを、証することともなったのである。

このように、清洲城下町の発掘調査は、奇しくも戦国期型城下町から近世の総構型城下町への移行——断絶と継承・飛躍——を解明する好個の場となったのである。ここに、今後の調査・研究上の第一の課題があるのであり、このことにこそ視点を据えて「清洲城下町に挑む」必要があるであろう。

(遠藤才文)

市杵島神社遺跡

豊橋市教育委員会

当遺跡は豊橋市牟呂町字市場46-1, 46-2, 市杵島神社境内に所在し、周辺は豊川と柳生川の間において市街地中心部から西方へと広がる洪積層の低い台地の西南端にあたる地域である。今回の発掘は昭和60年7月22日より12月13日にわたり実施されたもので、同市が行なう牟呂地区土地区画整理事業に伴う事前の調査である。調査区は面積約640㎡で神社境内、西側丘陵斜面の標高2.5~7mの地域に設定、主な遺構としては縄文晩期から古墳前期にかけてのハマグリを主体とした貝塚が約200㎡の範囲で確認された。この貝塚は厚さ約50cmで、条痕文系土器、弥生式土器、古式土師器等を出土し、調査区中央付近一帯から調査区外の東側境内にかけて丘陵状に堆積しているものと推定される。更に、この貝塚の堆積の上に古墳らしき墳丘が形成されており、調査区中央付近にて、ほぼ直角のく

篠島神明社貝塚

南知多町教育委員会

神明社貝塚は、昭和60年6月に篠島神戸の神明社境内で、社務所建設の工事により発見された。遺跡は地表付近から、平安、奈良、古墳、縄文後期という4期の貝層が、それぞれ上下に間層である有機砂層を伴って堆積しており、包含層の厚さは全部で5mに達する。

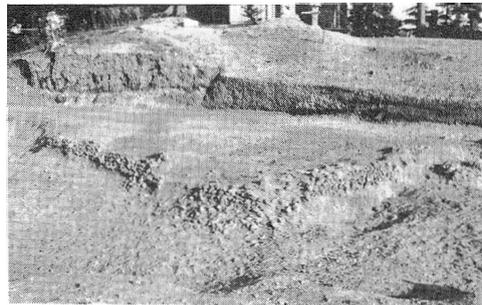
各時期の貝層とも典型的な岩礁性貝塚の様相を呈し、普遍的に獣魚骨を含む。特に縄文後期の貝層からは、シカ・イノシシ・クジラ・イルカ等の陸海の獣骨と共に、マダイ・クロダイ・イシダイ・スズキ・マグロ、サメ等の魚骨も豊富に出土した。また古墳時代と縄文後期の貝層の間に介在していた有機砂層からは、縄文晩期から弥生中期に属する土器と共に、合葬を思わせるかたちで少なくとも五体の埋葬人骨が検出されている。

人工遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、

びれ部をもつ石積み(7×7m)が検出されたが、この石積みは10~15cm大の円礫が約30cmの高さに5段から6段積まれている。又、周辺にて底部穿孔の壺形土器、高坏、器台等がくびれ部に落ち込んだ状態で検出された。

これらの結果及び神社全域の墳丘実測等から全長60~70m、高さ5mの前半期の前方後方墳である可能性は極めて強い。その他、近世の埋葬遺構が存在し、人骨が多く出土したがこれら人骨は横臥屈葬で、一部貝層を掘り込んだ状態で出土、永楽通宝及び開元通宝等を伴う人骨は多いが寛永通宝は出土していない。

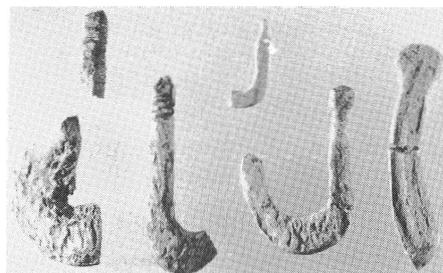
(豊橋市美術博物館主事補 朝倉美典)



須恵器、製塩土器、中世陶器の他、石器、骨角器がある。特に貝層中から出土した縄文後期の元住吉山Ⅱ式~宮滝式並行の土器は、質・量共に優れている。また同土器群に伴った骨角器も豊富で、鹿角製及びイノシシの牙製の釣針が9例、骨製及びエイの尾刺製のヤスが50例、鹿角製丹彩のヘヤーピン3例などが出土している。

古墳時代遺構の遺物では、鹿角製のモリ頭、鹿角装刀子、知多式と渥美式の製塩土器等が注目される。当貝塚出土のサメ骨の同定によって平城宮木簡に記載された『佐米』の種類^{さゝめ}の解明や、古代における文化圏の究明等の研究の進展が期待される。

(篠島小学校教諭 山下勝年)



資料紹介

大淵遺跡出土の井戸

大淵遺跡において検出された井戸遺構は、昭和60年12月までに28基を数える。今回は、その中でも最大級の規模を持つ60A1区SE01(図1, 写真1)の構造について紹介する。井戸の掘形は1辺4.2mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さ2.1mを測る。掘形底は青灰色砂であり、この上に方形の井戸側を設けた井戸である。長さ90cm、幅15cm、厚さ9cm程の角材の両端近くを相欠き組手とし、これを方形に組んで框とする。この組手の部分に^{はぞあな}杵穴を穿ち、下端に杵を造り出した隅柱を立てる。さらに框部分を貫通する柄の下部には隅柱の固定を確実にするた

め、水平方向に楔を打ち込んである。隅柱の内側2面には溝を造り、横板を落し込み、井戸側となす構造である。隅柱の現存長は1.5m程で、横板は8枚まで確認されたが、本来は地上近くに迄至っていたものと思われる。内法は60cmである。また、井戸側上部の外周には、隅柱様の柱が立ち、さらに多くの木片が確認されたが、腐朽が激しく、構造は明らかにしえなかった。おそらく地上に構築した井桁材の下部と思われる。井戸底には砂押えであろうか、細かく破碎した土器片が敷きつめられていた。出土遺物は、土器(図2, 1~3)、木片、種子等があり、平安時代前葉(9世紀)のものと考えられる。この井戸の周囲には、掘立柱建物群が存在し、大淵集落を解明する鍵となっている。

(梅村清春)

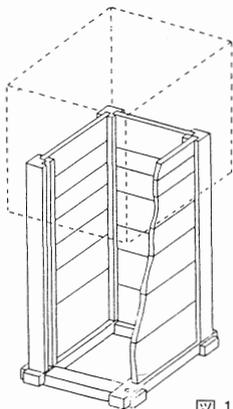
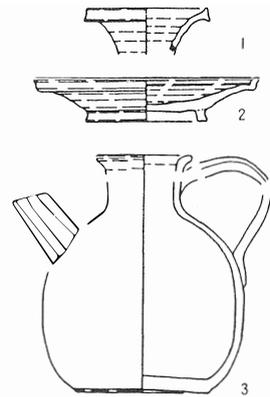


図1

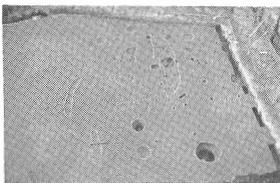


写真1



S = 1 : 4 図2

発掘ニュース



中世の屋敷地

大淵遺跡(C区) 平安時代の遺構と遺物を検出。(F区)建物6棟で構成される中世の小規模な屋敷地(13世紀中葉)を検出。(J区)古墳時代から平安時代のピット・溝群を検出。(K・L区)平安時代と中世の溝と土壇群を確認。



方形周溝墓

朝日遺跡(B・C・D区) 弥生時代中期末(高蔵式期)の方形周溝墓1基を確認。弥生時代中期初頭(朝日式期)の環濠と土塁を確認。弥生時代中期(朝日式期~貝田町式期)の住居群を検出。

石堂野遺跡

石堂野遺跡は既知の遺跡ではなく、御津地区の新設高等学校の建設に伴い、分布調査及び試掘調査によって新たに確認された遺跡である。遺跡は宝飯郡御津町豊沢地内の舌状に延びる丘陵尾根の平坦地上にあり、南西側に開けて平野部となり、三河湾を程近く望むことができる。

石堂野遺跡のある御津町は、隣接の地域も含め多くの遺跡が存在するが、特に奈良時代～平安時代には、豊川市内に三河国衙・国府、三河国分寺・国分尼寺が設置され、三河地方において政治の中心的な役割を占めるようになる。

遺跡は大別するとⅣ期に分けられる。

Ⅰ期 弥生時代～古墳時代前期にあたる。遺構は検出されず、欠山式期～元屋敷式期のS字状口縁甕・高坏・小型高坏や石鏃・磨製石斧などの遺物のみが出土した。

Ⅱ期 7世紀～9世紀にあたる。遺構は竪穴式住居21軒、掘立柱建物1棟（3×2?間）が

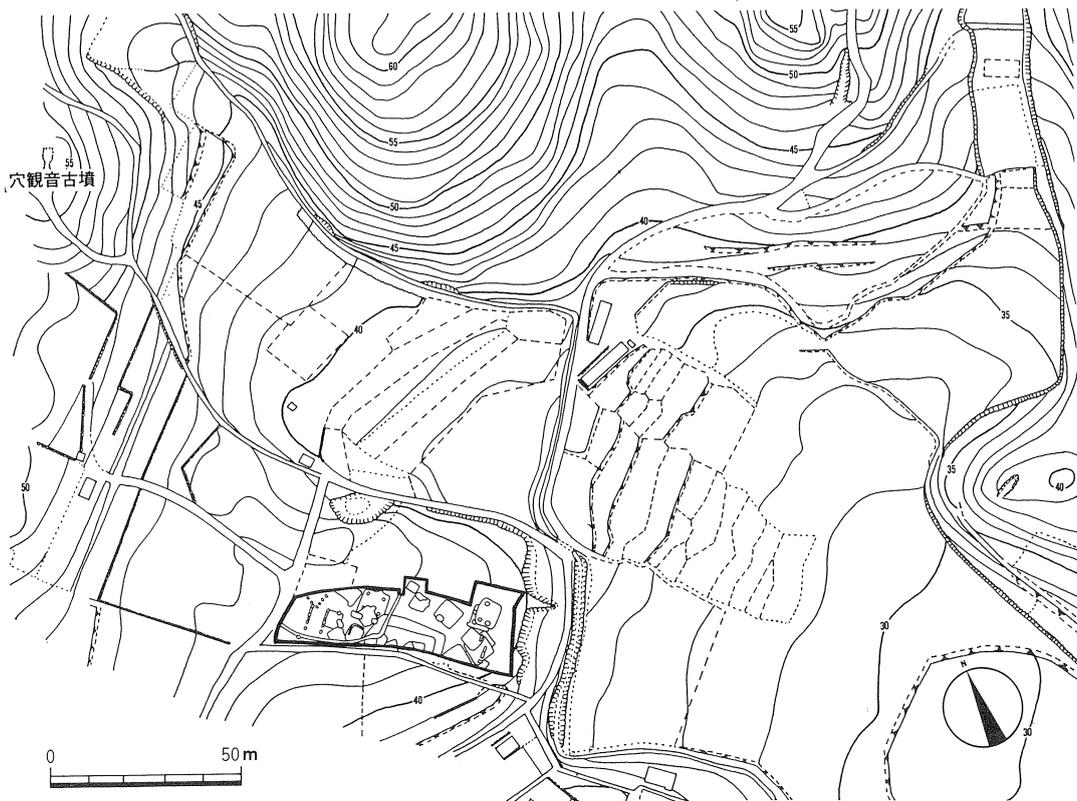
検出されている。竪穴式住居は一辺4～7mの方形を呈し、ほぼ北西側と南東側の二群に分れ、その中央部に方形に廻る溝がみられる。遺物は6世紀代のものから散見できるが、住居群の営まれた時期としては、7～9世紀がそれにあたるであろう。

Ⅲ期 16～17世紀にあたる。遺構は3間×2間の掘立柱建物が検出されたが、これには桁行側の柱穴間に溝が掘られており、板塀などの施設が考えられる。

Ⅳ期 幕末～明治期にあたる。ほぼ等高線に沿って走る溝があり、耕作用の灌漑施設かと思われる。

以上のように石堂野遺跡はⅡ期にもっとも遺構が密になる。この時期は、当地域に政治的な中心地が設置され、条里制の施行とともに平野部の整備が一段と進展するころにあたる。石堂野遺跡はそういった平野部の政治的な動きとどのようなかかわりをもっていたのか、今後究明してゆく必要がある。

(宮腰健司)



石堂野遺跡発掘区位置図

朝日遺跡

たまつくり

朝日遺跡における「玉作」の存在は、すでに原石、未製品、道具類の出土によって予想されていたところであったが、今回の弥生時代中期初頭に属する「玉作」跡の検出によってその予想が裏付けられた。

「玉作」跡は、北居住域の南縁、墓域（西Ⅰ群）の東にあたる、北を環濠、東西を大溝、南を谷に囲まれた、平面が台形をなす地区（面積約700㎡）に位置する。「玉作」跡は10m×9mの大型円形堅穴（6本柱）で、床面及び床面に掘り込まれた隅丸長方形土壇から、原石・管玉（製品・未製品）・切断具・施溝具・穿孔具・平砥石・玉砥石などが出土した。原石・未製品・工具類からみれば、管玉製作が主体をなしていたようであるが、製作中にできる石屑にヒスイの碎片が含まれていることをみると、勾玉も製作されたい。

朝日遺跡の管玉製作工程は、軟質の凝灰質頁岩を対象とするものについてのみ復原可能である。

- 第1工程** 原石を角柱状に荒割りする。施溝を併用するかどうかは不明である。
- 第2工程** 角柱状にした素材をさらに分割して、厚さ4mm程の板状にする。この場合も施溝を併用するかどうかは不明である。分割した板状素材には研磨を加えて面を平滑に整える。この時点で管玉の長さに合わせて板状素材の幅を決めているようである。

- 第3工程** 板状素材の短辺に平行して約4mm間隔で施溝する。両面から施溝した後、石斧転用とガラス質石英安山岩製のクサビ形石器を用いて切断する。
- 第4工程** 切断された素材の切断面を研磨する。この段階ですでに多角柱状をなしている。
- 第5工程** 石英製の角柱状錐を用いて穿孔する。穿孔は両側から行う。
- 第6工程** 多角柱状未製品の稜を研磨によって除き円柱状にする。この段階で肉厚を0.5mmまで擦り込んで製品化する。

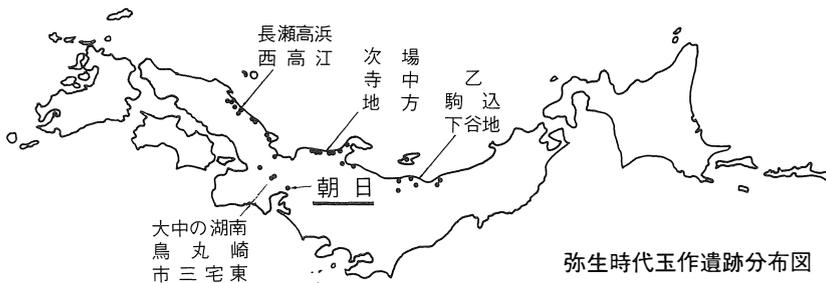
今回その存在を確認した「玉作」を、朝日ムラとの関係で考えると、幾つかの問題点が浮かびあがってくる。

第一は、「玉作」を行った人々の系譜である。「玉作」の行われた場所は四方を区切られ、「玉作」地区とでも呼称すべき様相を呈しており、しかもそれが環濠間に位置する点からいえば、朝日ムラの一般構成員とは区別されている。「玉作」地区で検出された中央炉穴をもつ径約3mの小型円形住居は、伊勢湾東岸に類例の少ないものであり、それが西日本に一般的である点は重要である。

第二は、「玉作」の人々と朝日ムラとの関係である。「玉作」の人々がどういった人々を対象に管玉・勾玉を供給したのか、また「玉作」の人々の生活はどのように保証されていたのかなど、明らかにする必要がある。

以上の他にも、朝日遺跡の「玉作」をめぐるには検討すべき課題は多い。

(石黒立人)



史跡散歩 No 3

大山廃寺跡



大山廃寺は、「西の比叡山，東の大山寺」と称された程，その規模・内容を誇る山岳寺院の雄であったという。当遺跡は小牧市の北東に位置し，児神社西側の細道を約70m程登ると，尾根上の整地された平坦面に，17個からなる礎石遺構が認められ，ここが国史跡として指定された塔跡である。昭和49年度からの発掘調査によって，塔の創建は7世紀末から8世紀初頭の頃であることが判明し，塔以外の遺構群も次第に明らかにされてきた。

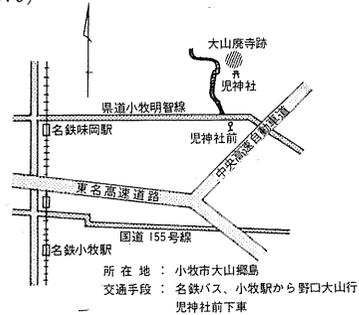
「満月坊」を始めとする建物群は広い範囲に点在し，「大山三千坊」と呼ばれたその偉容を垣間見ることができる。

大山廃寺は数次の盛衰をくり返しながら，中世末まで連続する山岳寺院跡として，出土する古代瓦を始めとする種々の遺物とともに，先人の信仰のあり方を考えるうえで，貴重な遺跡である。なお，遺物の一部は小牧市立歴史館で見ることができる。

(昭和4年 国指定史跡)

参考文献

小牧市教育委員会「大山廃寺発掘調査報告書」(1979)



センターニュース

来訪者

- 60・12/13 文化庁文化財調査官 佐久間 豊氏
- 12/21 和洋女子大学教授 寺村光晴氏
- 〃 新川第二小学校校長 佐々木幹夫氏
- 61・1/13 皇學館大學助手 岡田 登氏
- 1/22 岡山県古代吉備文化財センター 岡本寛久氏 他1名
- 2/19 長野県埋蔵文化財調査センター 寺島俊郎氏 他3名
- 2/27 尾張教育事務所管内派遣社会教育主事連絡会 佐藤堅三氏 他13名

日誌

- 60・12/12 名古屋市博物館に朝日遺跡出土の獣骨(シカ)をVTR資料として提供。
- 12/17 雄山閣出版から発行の「弥生文化の研究」(第7巻)に，阿弥陀寺遺跡の

遺構写真と遺構配置図を提供。

- 12/19 朝日遺跡玉作遺構等について，県政記者クラブ発表。
- 61・2/3~4 市町村埋蔵文化財担当職員研修会(専門研修会)開催。参加者48名。
- 2/15 京都大学池田次郎教授，朝日遺跡出土の人骨鑑定。

<現地説明会開催状況>

- 60・12/21 朝日遺跡(E・F・G区)
- 61・2/15 松ノ木遺跡(B・D区)

埋蔵文化財愛知 No 4

発行 昭和61年3月
 編集 財愛知県埋蔵文化財センター
 〒450 名古屋市中村区名駅二丁目44番5号
 名駅パークビル9F
 TEL 052-586-3155
 印刷 東海プリント社